

教育実践上の諸問題とエスノメソドロジー —エスノメソドロジーの「有用性」をめぐる—

上田 智子 (お茶の水女子大学大学院)

1. はじめに

本発表の目的は、教育実践における諸問題についての考察、ないし、その解決に、エスノメソドロジーがどのように貢献しうるかを検討していくことである。ここで「教育実践における諸問題」とは、教育実践における「課題」を遂行する、あるいはまた、その遂行を阻害する「問題」を解決する、といったような、教育学的な問題関心全般を指す。

一般に、エスノメソドロジーは、その理論的・方法論的な特徴ゆえに、教育や逸脱といった実質的な 이슈を扱うことは困難であると指摘されてきた (Hester 1981)。しかし一方で、エスノメソドロジーの「有用性」について、積極的に評価する議論も存在する。例えば、秋葉 (1996) は、志水 (1996) の提唱する「臨床的学校社会学」の流れの中に、エスノメソドロジーを積極的に位置付けようと試みている。エスノメソドロジーの理論的、方法論的含意の中に、「臨床的学校社会学」への貢献の可能性を見い出しているのである。

本発表では、まず第一に、国内および国外での、既存の教育 (社会) 学領域におけるエスノメソドロジーの評価について概観を行い、エスノメソドロジーの「有用性」についての議論のレビューを行う。その中で、カナダの教育社会学者 J.Heap の業績に注目し、彼の議論を参考にしながら、「教育実践における諸問題」に対し、エスノメソドロジーの為しうる貢献について、その具体的内容や方法を明らかにしたい。

2. エスノメソドロジーと「有用性」(1)

本節では、エスノメソドロジーを既存の社会学的関心と関連づけ、そこに理論的な「有用性」を見い出すとするいくつかの流れを示す。

(1) 権力分析とエスノメソドロジー

教育社会学において、教室における相互行為の成り立ち、あるいは教室における教師と生徒の関係の成り立ちに焦点づけた研究は、しばしば、それらを権力関係ないし権威的な関係として特徴づけてきた。そ

して、こうした権力ないし権威の具体的な成り立ちを示すとともに、「制度」あるいは「役割」に付随したもののようにつえられる「権力」ではなく、相互行為の過程において／として現象する、局所的で微細な権力作用を明らかにするという役割がエスノメソドロジーに求められたのである。

(2) 社会化研究とエスノメソドロジー

「大人」と「子ども」というモデルに基づき、社会化のプロセスを、「大人」から「子ども」への規範の内面化過程として把握することへの批判、すなわち、(a)「子供」の解釈過程を重視したり、(b)「社会化」場面の相互行為的な成り立ちを記述し、「大人」「子供」といったカテゴリー化が、そうした過程の産物として可能であることを指摘する諸研究である。

3. エスノメソドロジーと「有用性」(2)

—社会的組織化としての「学習」—

以上の流れにおける社会学的な問題意識にとっての「有用性」とは別に、教育実践家の問題意識にとって、エスノメソドロジーがいかなる「有用性」を持ち得るのかを、検討する。

具体的には、「学習」を、エスノメソドロジー的に、すなわち、具体的な場面と結び付いた、社会的組織化 (social organization) として捉える視点が、教育実践にとってどのような示唆を含んでいるのかを明らかにする。

【主たる参考文献】

- 秋葉昌樹 1996 「エスノメソドロジー類型学と『教育の臨床エスノメソドロジー』の可能性」『現代社会理論研究』第6号、99-108頁。
- Heap, J.L. 1990 "Applied ethnomethodology: looking for the local rationality of reading activities.", *Human Studies* 13:39-72.
- 志水宏吉 1996 「臨床的学校社会学の可能性」『教育社会学研究』第59集、55-68頁。
- R. Watson 1992 "Ethnomethodology, Conversation Analysis and Education: An Overview", *International Review of Education* 38(3):257-274.